

シャンハイ・イメージをめぐる〈日本視線〉の変化

—転機としての1931年—

徐 青*

Change of Japanese Public Gaze on Shanghai Image: The Turning Point of the Year 1931

XU Qing

Abstract

This paper uses relevant literature to examine the images of modern China (Sina), in particular Shanghai, held by Japanese. It also analyzes how these images were initiated and developed in the history of Japanese-Chinese bilateral relationship, which was deeply affected by some significant events such as “Shanghai Incident”, and seeks to clarify what kind of changes had occurred among the “Japanese masses” in the period prior to and shortly after 1930. This study focuses on the contents of an editorial column entitled “Ero Guro Nonsense” featured in the magazine “Crime Public Opinion”, which was considered to be representative of the Japanese popular masses at the time. This paper analyzes the images of China (Sina), and particularly of Shanghai, depicted in these publications.

1. はじめに

近代日本にはどのような中国（支那）¹⁾ イメージが存在してきたのであろうか。近年、政府関係機関、民間学術機関など各種の機関で実施されている研究プロジェクトに於いて、中国（支那）イメージをいかにとらえたらよいのかという視角はさまざまである。いうまでもなく、この問いはいろいろな前提条件を付加しなければ問いとしての意味を持たない。なぜならメディアがどのように誘導するのかによって、短期的にみると大きな差異が生じることがあり、そればかりでなく、国際環境や相互関係が変化すれば、当然相互のイメー

ジにも著しい変化が生じるからである。もちろん、そのイメージを保持している主体がどのような階層の誰であるかということも考慮しなければならない。

そこには、中国（支那）全般のイメージとシャンハイ（上海）²⁾・イメージとの差異をどのように区別したらよいのかという問題もある。

実際、中国（支那）イメージとシャンハイ・イメージを混同して中日関係一般を考えると、いったことは、これまでに起こってきた事であり、「上海で中国を考えてはいけない、北京を基本に中国（支那）イメージを再構築すべきだ」といった言説が、しばしば繰り返されてきたことも事実である。

「北京を基本に中国（支那）イメージを考え

* 国際開発研究科博士後期課程

る」というのは、どういう意味かという、政治中心主義的に中国の複雑さを認めるのではなく、それぞれの地域の現象を北京の諸現象と比較して中国（支那）を理解しようとするものである。

近代日本においては、どうしても上海は中国認識において別格に扱われる。それは上海自体に存在してきた国際性のゆえに他ならないが、何よりも、幕末以来の日本人の多くが最初に降り立つ「中国」（支那）は、上海に他ならなかったからである。欧州へ向かう場合なども含め基本的に欧米の租界が存在した関係もあって、上海が第1経路地となっていたと考えられる。

本稿では、まず、近代日本に於ける中国（支那）に対する認識パターンがどのようなものであったのかについて先行研究をもとにまとめておきたい。さらに、その認識パターンに於ける基層が「上海事変」を経てどのように質的に変化したのかについて、1930年前後に日本でも台頭してくる「大衆」概念を手掛かりに探っていく。その場合、本稿が主な考察対象とするのは、『犯罪公論』⁹⁾ という雑誌の特集記事である。それは当時の集約的な「表現」の一つだといえる。そして、中国（支那）イメージの中でもそこにとりわけ表象されている〈シャンハイ・イメージ〉について考えていくことにしたい。

2. 近代日本の中国（支那）認識パターン

「日本における中国観の変遷」、「日本人の中国観、中国イメージ」などに関する研究は、これまでも比較的良好に検討されている領域である（山根ほか1992）。一般的な傾向として、

従来は誰が中国について何を記述しているのかといったテキスト分析中心の研究であった。おそらく今後は、メディアの進化に伴ってさまざまな社会調査法を駆使した社会学的統計学的分析も、これに加えて増えていくに違いない。とはいえ、「イメージ」の問題は、現時点で入手可能な経験的データの集約だけで云々できるものではない。そこには理論的考察が常に求められている。

ここではまず、近代日本における初期「中国（支那）イメージ」形成期である幕末維新期の「核」となるいくつかの問題を、この領域で数多くの研究業績を残している小島晋治氏の論文「日本人の中国観の変化—幕末、維新期を中心に—」（小島2002）を適時参照しつつ、以下に整理していくことにしよう。

近代日本の中国（支那）認識パターンの基層は、歴史的な脈を考慮すれば、まさにその幕末維新期に構築されたといえる。その基層が基本的認識パターンを構築し、それが繰り返して日本社会に登場している。それはまさしく西欧からのオリエンタリズム（サイード1986）によくあらわれる近代の他者イメージ形成をめぐる諸特徴を備えたものに他ならない。

そこでまず肝心なことは、近代日本にとって中国（支那）との関係は、日本のある種のナショナリズム運動としての「国学」の動向と、後にはペリー来航として時代を画することになる近隣海域に出没し始めた「異国船」による〈西欧の衝撃〉の二つを連動させて考えられているということである。

近世の日本の儒者たちは、「夷狄」すなわちヨーロッパ勢力に抗する上で「神州と唇齒をなす者は清なり」と考え、清国＝「漢土」を「中華」として崇拜することは否定しつつも、

儒教を守っている限り、清への敬意親近感は抱き続けていた。その一方で、国学者たちは「(日本) 建国の神話的『事実』そのものに基づいて、日本が万国の親国である」とした。これは儒教の名分論を主たる根拠とした儒者たちとは異なっていた。ただし、同じ国学でもこうした「清」認識とは異なる学派も存在したようである(植手 1974: 241)。

……後期水戸学派は国学者のこの根拠をも、その日本神国論に摂取した。また彼らは儒教を本来人間自然の情をねじまげた作為的な「からごころ(唐心)」としてしりぞけ、儒教が入る以前の日本に固有の「やまとごころ(大和心)」を見出して、これこそ人間の情意を素直に肯定した価値高きものと主張した。だから国学の考え方からすれば、中国を「華」、まして「中華」とみなすいわれはなかったのである。だが植手通有が指摘している所によれば「(儒者、国学者) いずれの場合にも、その日本中心主義は中国コンプレックスの単なる心理的裏返しにすぎなかった。彼らの心裡にも、中国の文物に対する尊敬が根強く存在していた」と言う〔下線強調引用者〕。

このコンプレックスの存在が、自己のアイデンティティの問題と必然的に絡むことは、洋の東西を問わない。小島はこれについて、「一八世紀後半から強調され始めた」「日本中心主義は、ロシアの千島、北海道など北辺進出を契機に強く意識されるようになったヨーロッパ諸国の外圧を前に、国家的な意識が高まり、日本のアイデンティティをどこに求めるか、という思想上の課題に答えようとするものであった」としながら、「一八世紀末以降、蘭学をつうじてヨーロッパの事情とそこにおける医学、天文学、歴史学、地理学、航海術を

学び始めた一群の蘭学者が、もうひとつ別の角度から中国文化崇拜批判を展開するようになった」と指摘している(小島 2002: 96)。彼らは儒教を唯一絶対の文化的価値とはみなさず、世界に存在する多様な文化の一つとみなし始め、儒教と中国の伝統文化を相対化していたのである。

18世紀末の『経世秘策』や『西域物語』で知られる本多利明は、「日本は支那より見れば大に誉れにて、神武以来皇孫を失わず、他国の為に侵されず、かほど日出度日本の風俗なる、兎角に支那の風俗を規鑑とする、浅墓成次第也」(本多 1970: 149)という。さらに「文字は事を記し、情を述べるを旨」とするという立場から、「支那の国字数十万」(本多 1970: 29)に対する日本のかな文字及びヨーロッパのアルファベットの優位を主張し、漢字よりも日本のかな文字で記す方がはるかに便利なのだ、と漢字文化からの自立を訴えている。

この言語的革新へ向かう傾向の存在が18世紀近世日本の特徴的事態であったこと、そしてそれこそが近代日本の性格形成への基層を構成していたことは、すでに酒井(2002)で指摘されている。そして、そうした日本国内の動態が東アジア全体の情勢変化の中で近代日本の中国(「支那」)認識を徐々に構築していった。

東アジア国際政治情勢の変化は、「鎖国」(幕府管理貿易)下の日本国内へも伝わっていた。たとえば、渡辺華山は、1834年東インド会社の対中国貿易独占権が廃止されて以来イギリスの東アジア市場開拓の動きはいちだんと活発になり、日本もその対象として着目されてきたこと、1837年には在中国のイギリス官憲が無人島(小笠原諸島)占領を計画して、

軍艦一艘を同島調査に派遣したことなどの動きやイギリスの力をよく認識していた（小島 2002：98）。

もっとも、清国がアヘン戦争（1840～42年）でイギリスに敗れるまで、ほとんどの日本の識者は一般に清国を世界有数の大国、強国と考えていた。対清への対応が急速に変化するの、明らかにアヘン戦争を契機としている。

1808年に『防海策』を著わし、その段階では大清国は日本にすぐ近いので万一ここに狡猾な君主が出現して「兼併」の志を起したら、日本にとってその患いはロシアのそれなどとは比べものにならぬほど大きいから、清国にはへり下って大金を使っても「与国（同盟国）」となり、交易を通じて通商の利益を取めることが必要だとして、「和親交易を旨とすべきだ」と主張していた佐藤信淵も、アヘン戦争後の1849年『存華挫狄論』を書いて次のように主張した。

……満清も夷狄なり、英吉利亜も夷狄なり。然るに愚老がイギリスを挫きて満清を存せんと欲する者は、満清の中華を一統して、仁明の君、数世継出で、天意を奉るの政を行ないけるを以て中華の人民に蕃息し、古の三倍に及べり、故に我れ其の功を賞するの意あり。且つ又彼満清は今の世に当りて世界の大邦たり。然れども蒙古のフビライの如く、我本邦を凌ぐの行ひなし。然るに近来倏然として自ら大として外攘の武事を務めず。故に英夷之を侮り舟師を師い来て侵伐し、共に戦ひて数々大に打破り、江南四省に血を流す。満清防ぎ戦うこと能わず、金を納れ、五都会の地を割きて（上海などの五港開港を割譲と誤解したものか？）和を乞いたる、上に詳なり。もしそれ、この上にも国益を式微するときは、西夷貪俵あくなきの禍い、あるいは東慚して

本邦に至らんことをはかる。故に愚老は満清の君主をして心を苦しめ、思いを焦し、貧を賑し、死を弔ひ、上下労苦を同くして兵を訓練すること数年、乃ち復讐の義兵を起し、英夷を征伐して大いに此を打破り、悉く侵地を恢復し、厳しく此を逐攘て東洋に遺類なからしめ、永く本邦の西屏たらしめんことを欲す……（小島 2002：104-105）〔下線強調は引用者による、（ ）は小島に拠る〕。

「我本邦を凌ぐの行ひなし」という断言から、日本にとって「満清」は脅威ではないという認識があると同時に、さらなる脅威としての「西夷」が「東慚して本邦に至らんことをはかる」ことへの危機感を高めている⁴⁾。

清のアヘン戦争による敗北は、清国が「真に柔弱の国」で「最早疾病肺肝に入る。之を療治する方なけん」（薩摩藩主島津斉彬の所感）という「幻滅」を生じさせたことは言うまでもないが、逆に、「満清」国内の改革による国力回復を期待する日中連帯論が、日本の「国益」の概念によって構築されている。

蘭学を学んで幕府の海軍建設の中心となった海軍奉行勝海舟の場合、さらに一步進んで日本・朝鮮・中国の同盟を構想し、これを長州藩のリーダー桂小五郎（のちの木戸孝允）らに説いてその同意を得ている。その文久3年（1863年）4月27日付日記には次のような記述がある。

……今朝、桂小五郎、対馬藩主大島友之允同道にて来る。朝鮮の議を論ず。我策は、当今アジア州中ヨーロッパ人に抵抗する者なし、これ皆規模狭小、彼が遠大の策に及ばざるが故なり。今、我邦より船艦を出だし、弘くアジア各国の主に説き、横縦連合、共に海軍を盛大（に）し、有無を通じ、學術を研究せずんば、彼が蹂躪を遁がるべからず。先ず最初、

隣国朝鮮よりこれを説き、後、支那に及ばんとすと。同人、悉く同意……(小島2002:105)〔下線強調は引用者による、()は小島に拠る〕。

ここで勝のいう、海軍力の強化と学術研究の重要性がアジア「横縦連合」の基盤だという考え方の存在は、彼らが当時の欧米におけるオリエンタリズム(文字通り「知は力」)の何であるかをよく理解していたことを示している。

アジア連体論と時を同じくして、朝鮮、中国に進攻し、そこに勢力を築くことによってヨーロッパに拮抗する力を持つべきだとする侵略論もすでに提起されていた。吉田松陰は、1855年にその兄に送った書簡の中で「同志一致の意見」として、ロシア、アメリカとの取り決めがすでに決まった以上、日本の方からこれを破って夷狄に信を失うわけにはいかないが、規則を厳しく、信義を厚くして、その間に国力を養い、「取り易き朝鮮、満州、支那を切り随え」、貿易によってロシアなどに失うものを、朝鮮、満州の土地で償なうべきだとしている(小島2002:101)。

また、越前福井藩の橋本左内も、1857年の書簡の中で、日本の独立は非常に困難なことで、独立する山丹(沿海州)、満州あたりの土地、国を併合するばかりでなく、さらに今は難しいが、アメリカ州あるいはインドの地内にも領土をもたなくては望み通りにはいかない、インドは西洋にすでに領有され、山丹あたりはロシアが手を付けている、しかも日本は力不足でとても西洋諸国の軍隊に敵対して毎年連戦することは覚束ないので、アジアを一個の東方の藩屏とみなし、西洋を味方と思い、ロシアを兄弟唇齒の国として、近国を占

領、支配することが重要だとしていた。そして、こうしたテキストに基づいて、小島は以下のように総括している。

……アジア連帯論も侵略論も、西欧勢力の全世界への拡張によって大きく変化した世界の中で、日本の「独立」をどう守り、実現するのかという観点から主張されている。但しその「独立」は他の諸国・諸民族に対しても同様に尊重しなければならぬ普遍の原則だという思想は、当時の日本にはまだ生まれていなかった。だから徹底して自国本位で、状況認識如何で同じ人物が連帯論者にもなれば侵略論者にもなり得た(小島2002:106)〔下線強調は引用者による〕。

西洋諸国が尊重しなければならない「普遍の原則」として、「他者」であるアジア・アフリカの諸国・諸民族に形式的であれ「独立」を認めるようになったのは、ようやく20世紀後半に入ってからであり、19世紀の西洋諸国は非キリスト教徒の「国」を自分たちと同じ「文明国」であるなどとは一切考えてはいなかった。ましてや、そもそも「国のかたち」そのものが異なるのであるから、自分たちが辛うじてアイデンティティを共有できる何らかの新たな空間として立ち現れ始めてきた「自国」を「本位」とする以外に対外関係を思考できなかったのであろう。

アヘン戦争は言うまでもなく治外法権や不平等関税等々の諸対応を見れば一目瞭然であり、『万国公法』の翻訳などを通じて日本が当時西洋列強の「ダブルスタンダード」にいち早く気づいていたことは明らかである。同時に、西欧列強の「国際関係」基準の適用されない地域が、領土的拡張の対象となっているということも認識されており、日本の北海道

や沖縄、台湾、朝鮮半島などへの侵出が、西
 欧列強諸国の秩序認識と東アジアにおける
 「国境の曖昧性」との間隙をぬったものである
 という点も、よく知られている。

そうしたイメージの中での「清国」とは、
 西欧列強諸国の進出に対抗する上からも正式
 な関係を樹立する必要がある。その準備工作
 として、まず人を清に派遣して清国の事情、
 とくに上海における貿易事情を現地に入って
 調査するため、1862年上海に「千歳丸」が派
 遣された。その乗船者一行の報告によって清
 国へのイメージはより具体的なものになって
 いく。

佐藤三郎は、幕府直参ばかりでなく諸藩の
 俊才が多数加わっていた「千歳丸」の日本人
 参加者一行が帰国後記した現存する諸記録に
 基づいて、(1) 上海の繁栄 (2) 上海市街の
 混乱と不潔 (3) 難民の惨状 (4) アヘン害の
 滲透 (5) (清朝) 官人の墮落 (6) 軍事事情
 (7) 「長髪賊」と英仏軍 (8) 日本人に対する
 期待と歓迎 (9) 漢字文化圏内の一体感 (10)
 中国対策観の各項目に分けて整理している
 (小島 2002 : 107)。

それをよく読めば、従来一種の「空論」と
 してあったイメージの「満清」が、ここで実
 際に見聞されることによって、新たな「幻滅」
 と自国本位の「教訓」とを引き出すことにな
 り、それらが近代日本の中国（「支那」）認識
 の「核」となっていく過程がよくわかる。

……彼らが最も衝撃を受けたのは、孔子廟ま
 でもイギリス軍の兵舎と化していたことや、
 「支那人は尽く外国人の使役となり、英法
 (仏) の人街市を歩けば、清人は皆傍に避けて
 道を譲る。実に上海の地は支那に属すと雖も、
 英法の属地と謂うも又可なり」と高杉晋作が

記している半植民地的状況であった。また欧
 米諸国の壮大な商館が林立し、数千隻の軍艦
 商船が碇泊している上海港や租界の想像を絶
 した繁栄と荘麗の一方で、旧城内で見た市街
 の、ゴミと糞便で足の踏み場もない臭気芬
 たる汚穢、悪臭であった。「軍中皆鴉片烟を
 吃する」アヘンの滲透や、残り物の菓子を下
 げる途中で袂に入れたりする下級官吏の卑し
 い振舞（峰源蔵「清国上海見聞記」と相まっ
 て、彼らはこれを清朝の救い難い「乱政」の
 所産とみなした。そしてこれらを「支那の事
 に非ざるなり」（高杉晋作「掩留目録」と、
 日本自身にとっての戒めと考えた。他方では、
 多くの中国人が示した親愛の態度から、同じ
 東洋人として「倭（日本）漢人自然に相通ず
 る」親近感を感じつつも（納富介次郎「上海
 雑記」）、現在の清軍の弱体ぶりからすると
 「我が一人彼の五人に敵せん。若し一万騎の
 兵を率いて彼を征せば、清国を縦横せん」
 （峰、前出書）とゆうような所感を記する者す
 らいた（小島 2002 : 107-108）〔（ ）は小島
 に拠る、下線強調は引用者による〕。

「上海＝中国（「支那」）は穢い」という近現
 代日本における認識の起源は、こうした彼ら
 の観察記述によるにちがいない。近代社会と
 衛生観念との関係については多くの研究がす
 でであるが、この「日本人」一行が上海で体
 験した「ゴミと糞便で足の踏み場もない臭気
 芬芬たる汚穢、悪臭」の性格をどのように分
 析すればよいのか、よく考えてみる必要があ
 る⁵⁾。

「乱政」により「美しい日本」からこの「穢
 い上海＝中国」へ移行してしまう可能性を察
 知し、「支那のことに非ざるなり」という危機
 感を抱いた結果、「清国を縦横せん」という認
 識に到るというカタチで、以後の近代日本に
 よる中国大陸への侵略が「正当化」されてい

く思考の流れの基層が、ここには端的に示されているといえる。つまり、近代日本に西洋文明が流入してくる窓口としての上海は、日本が生き延びるためにいずれにせよ「掃除」されなければならないというのである。

3. 転機としての1931年

幕末から維新期にかけて構築されたであろう「近代日本の中国（「支那」）認識パターン」は、基本的には明治近代国家成立後も存続した。そこでは、清国は西欧列強の脅威に抗する防衛線として同盟したり併合したりすべき対象であり、西欧列強に対して脆弱でその統治機構はすでに腐っているので、その内部からの改革・革新が必要とされている、場合によっては日本がそれを断行してもよいといった基本認識が形成されていた。

その意味でも、「日清戦争以降」の過程における朝鮮半島の併合や清国内の革命勢力への非公式的援助や連帯などの動きを、一面的に「侵略」とまとめて評価して、複雑な歴史過程そのものを単純化すべきではない。

ここで、日中（「清」「支」）関係において重層的にさまざまな諸関係が複合している日清戦争以降の状況の質を画期的に区別する1930年前後の時期について考えるべきである。とりわけ「1931年の転換点」についてさらに検証する必要がある。

「1931年の転換点」が転換点である理由は、近代日本が明確に中国を支配の対象として見なすような視線を「支配」のベクトルへ根本的に変質させたといえるからである。そこでは明確に、帝国主義者の植民地原住民を支配し差別する構造としての欧米オリエンタリズムが不断に模写されている。

その模写には「大衆」⁶⁾という新たな現象も著しく進行している点にさらに着目されるべきであろう。一部の支配層だけでなく、日本社会の隅々にまで、支配の欲動が大衆的な広がりを見せて存在するようになり、それを媒介したのは当時画期的に進化したマス・メディアに他ならなかった。

そこで、ここでは第一次上海事変への雑誌メディアの反応をいくつか取り上げ検討する。具体的には、『犯罪公論』、『プロレタリア科学』、『女性』、『外交時報』などの雑誌や新聞による、事変の直前直後に現れた上海に関する記事の記述スタイルから、上述の上海＝中国（「支那」）への視線の質的な違いの徴候を探ってみることにしたい。

まず、『犯罪公論』の1932年4月号には、感情的な「支那人差別」を強調する次のような記事（「排日と奪われた貞操」）がある。

……最後に、濟南事件に於ける日本婦人のエロ被害を書いてみよう。

この事件に崇られて、貞操から生命まで奪はれた日本婦人の災難といふのは、筆舌の盡し得るところでない。この事件に於て、支那人は、その本来の淫虐性を、遺憾なく發揮したと言つてよい。……こゝに至つては、われ等はもう、支那人に對し、人間という觀念はもてなくなる。……在來の日本の對支外交の失敗は、對支貿易に、一打撃を與へてゐるが、それと共に又、日本女性に、痛ましい被害を與へてゐる。而してそれは、少しも表面に現はれてゐない。現はれてゐないが故に、支那人の暴虐ぶりも、黙殺の形である。かういふことを知つたら、少しは、支那人の正體を知る一つの参考ともなるであらう。

女のごとく拗ねて、宣傳が、うまくて、ウソを堂々と言つて、陰險で、淫虐で、疑ひ深い支那國民といふ奴は、全く、煮ても焼いても

食へたものではない(池田 1932: 68)〔下線強調は引用者による〕。

「支那人は、その本来の淫虐性を、遺憾なく發揮した」「支那人に對し、人間という觀念はもてなくなる」「支那人の正體」「支那國民といふ奴」といったネガティブな言説を集約したようなこれは、日本婦人がいかに支那の暴漢に陵辱されてきたのかという「事實談」という構成をとっている。そして、その「非人道な支那に對し、少しは義憤を感じてくれ」(池田 1932: 63) というまえがきで始まっている。

池田桃川⁷⁾ という人物は「上海通」として知られたライターであり、「支那」を知っているという矜持があるがゆえに、ここまで定型的なオリエンタリズム言説を直接表現する文章を著せるのであろう。

第一次上海事変が起こる前に、池田が雑誌『女性』の 1928 年 4 月特別号に書いた、たとえば以下のような「上海もの」と上の記事とを比較対照すると、そこに著しい変化があることを確認できる。

……上海へ初旅をする者は、黄浦江の突き當りにあたつて、空を切り裂く峨々たる洋館が、横にたなびく雲の如く櫛比して、江面を威壓してゐる壯觀に、一驚を吃するであらう。支那と言へばすぐに、横濱の山下町か、神戸の山手通りを聯想し、小便臭い細小路の街とばかり思つてゐた旅人の目に、アスファルトの道を音もなく迂る自動車や、未來派の構圖の如き奇妙な住宅や、數十人を容るゝダンスホールなどが映ずる時、旅人は、その豫想の裏切られたのを驚くと共に、この港の町が、「支那の上海」でなくして、「西洋の上海」なることに氣がつくであらう。それほどその外

觀は、文化的であり、壯麗である(池田 1928: 114)。

この評論が書かれた同じ年の 1928 年 5 月 3 日に起こった「濟南事件」について、その 4 年後の『犯罪公論』4 月号に上のように書いたわけであるが、どう考えてもその文体には著しい差がある。「支那の上海」は「西洋の上海」であるが、それが日本による支配に話が及ぶ時には「小便臭い細小路の街」に舞い戻るのである。

「上海事変特集号」として発行された『犯罪公論』1932 年 5 月特輯號は、実に奇妙な編集となっている。

巻頭に「志士人傑暗殺刑死畫集」が配され、それに続いて「『犯罪公論』全肉体美ミス・ニッポン懸賞寫眞第一回發表」(選者には、谷崎潤一郎や佐藤春夫なども名を連ね、応募者は「東京府」など国内各地の他「支那上海」の者も同列に並んでいる)として多くの女性の水着姿の寫眞が並んだ後に、そこからうって変わって「身を持ってめぐり込んだ本誌上海特派員が、砲彈の音を聞きながら蒐集して戻ったもの、事實は正に新聞等の報道以上」としている。そして、上海で収集した「抗日」の数々のポスターやビラを、「街も家もは抗日ポスターで充満されてゐる、これに居留民が平然として居られるか！ 當事者は、居留民が憤起する以前に先づかけあへ！ 善處しろ！」といったスローガンとともに誌面に掲載している(支那排日ポスター畫集 1932: 14)。

記事の部分でも、犯罪公論特派員「戦禍の街上海から」という特集記事編成を行っている。「我々特派員は、吳淞沖から既に砲彈の音を聞いた、我々が上海に上陸するや、砲彈は秒間を入れず物凄い音をたてた、そして時

折り豆を煎るやうに、けたたましい機関銃の音だ、街はつきつぎと廢墟のやうに破壊されて行く、その焼け爛れた街の中から、危険極まる支那人街から、英佛租界から、敵の背後から、掘み出して來たのが即ちこれだ！ 先づ我々は我々の収穫をささげる」（犯罪公論特派員① 1932：70）、という具合に、現場の写真もふんだんに使用されてドキュメンタリー性を強調する叙述となっている。その叙述スタイルから上海で起こっていた事態の深刻さは感じ取れる。だがそれと同時に示される“敵の背後から”という表現からは、明らかに上海事変が起こる以前の中国（支那）人、上海人に対する感じ方が、根底から変化していることを窺い知ることができる。

また、同じ号の「編輯後記」では、「世を擧げて血とテロに怖えてゐる三月八日我が犯罪公論上海特派員が多大の収穫を擣んで戻つて來た。平時の時單なるエロや獵奇を求めて行くのとこと違ひ、戦禍の巷へ、間近に砲彈の音を聴きつゝ、或時は頭上に小銃を浴びながら、或る時は恐る可き便衣隊の襲撃を受けながら、火をぐゞり、廢墟のやうに焼け爛れた灰塵の中から、或は敵の背後から或は危険極まる佛租界英米租界の中、或は支那民家の中から掘み取つて來た材料は、到底雑誌の十冊や十五冊には掲載しきれものではない、とまれ行く者も決死なら送るものも又決死の覺悟を以つてした。そして目出度三月八日の凱旋だ、まづ我々は、我が犯罪公論の特派員の勞苦を謝し、同時に犯罪公論を支持しいろゝ便宜を與へて下さつた上海の方々に心からなる感謝と尊敬の念を捧げる。/持つて來た特別寫眞約千葉、殊に敵の背後より撮つた寫眞や血潮を浴びたポスター、砲彈に當りながら不發のために焦げ砲彈と共にあつた新聞紙な

どは正に貴重な資料と言へよう、まづ我々は我々の汗と血の結晶をささげる。上海では居留民もまた銃後で必死の闘ひをした。國をあげての防衛、戦闘、攻は正に國民全部の上に、/五月號は特輯號として「志士人傑暗殺刑死畫集」と「支那排日ポスター畫集」を輯録した。前者は刺客テロ横行時代に見てこそ價值あるもの、後者はこれを剥ぎとるために幾度邦人の血が流され、闘争が繰り返されたかを如實に物語る好資料、未だ何人の眼にも映じなかつた血を浴びたものもある筈である。/特派員の勞作「戦禍の街上海から」は、歸るが否やその夜から不眠不休でまとめたもの、「惡辣極る排日の真相から日支兩怨破裂に至るまで」「中國大人はデマがお好き！」「排日侮日傳單剥がし武勇談」「戦場で拾つたエピソード物語」「砲彈物語」「陣中美談逸話集」「便衣隊小史」「便衣隊跳梁記」の八篇をまとめた。まとめるに當つては特に事實に忠實であること、平易であることに重點を置いた、とまれこれは上海事變裏表の完全なる全部的辭典である」と記されている（田中 1932：294）。

この特集号には、まず「まとめるに當つては特に事實に忠實である」中国通（上海通）と言われる井上紅梅の「惡辣極る排日の真相から日支兩怨破裂に至るまで」という記事が現れる⁸⁾。この井上の語る「上海事變の真相」は当時の事變への日本人の一般的理解を表象している。「日本の大工場の前で、この工場に勤めている中国人が日本の僧侶を襲つた」際に、その会社の日本人職員たちはどこにいたのであろうか、なぜその僧侶たちを助けることができなかつたのであろうか、といったことは、それが謀略であれば何の不思議もないのだが、井上はそれ自体には何も疑問を抱いてはいない。

井上の記事が、「客観性」を装いつつ「事実経過」のようなものをまとめているのに対して、犯罪公論特派員「中国大人はデマがお好き！—上海事変支那紙宣伝物語」⁹⁾のように、「敵」方による言説の信憑性を疑わせるようなテキストを配置する雑誌構成は、実に巧みであるといえる。編集自体に大きな意図は感じられないものの、全体の調子は「支那人」に対するネガティブな表現を機関銃のように掃射している記事内容であり、それは小さなコラムにまでも及んでいる念の入りようである。にもかかわらず、魯迅の小説の翻訳の出版広告が同じ雑誌に掲載されていたりするのである。

一方で、次のような国際情勢への思考を促し警告するような言説も登場している。

……支那の排日思想は三民主義革命以來青少年に扶植せられたる教育に基く對日反感であつて、その根柢は相當深いものがある。殊に國內の情勢が常に民心を對外事件に依つて牽引する必要が關係上、何れの政權獲得者も、強弱の差こそあれ、排日政策を政權維持の條件として政綱の一に掲げ來つたのである（武藤 1932：53）。

……讀者は、以上私の説述に依つて、窮極に於て支那に對し帝國の威力を示さざる限り、眞の解決に到達し得ないことを諒せらるゝことゝ信ずる。然り帝國にして斷固たる決意さへあれば、南京の攻略は無論のこと、長驅武漢或は洛陽を占據することも必ずしも難事ではない、又現下の世界情勢は兵略的、政治的、經濟的に見て列強の抗議の如きも敢て恐るゝに足らないことを確信する。 / 然しながら、帝國は尚別に一考を要するものがある。それは東洋の盟主を以て自ら任ずる帝國が、支那に徹底的打撃を加へ中華民國の國礎を益、薄弱ならしめ、惹いて支那の分割乃至は國際管

理を誘致するが如きことが東洋永遠の爲め果して適當であるか否かである。……茲に於て上海事變の解決は、一面支那に對して帝國の威力を示すの要求と、他面なるべく列國と協調して穩和に事を處理せねばならぬといふ相反する二つの要求がある。從つて帝國の策定すべき事變解決策の基調は此の二つの反撥する要求を調和するところに求めねばならぬ（56-57）〔下線強調は引用者による〕。

陸軍歩兵少佐であった武藤章氏によるこのような主張には、上海というロケーションがこの「國際感覺」を否が応にも呼び起こしているところがある。

次のような中國經濟専門家の井村薫雄氏による「シャンハイ」をめぐる現実的國際關係認識もあるが、より秩序の安定した帝國主義的國際共同管理下にシャンハイを置こうとする発想には、よく考慮した評価がなされるべきであろう。

……最近に於ける此の事實、即ち全國的な郵便局員の大罷業と上海租界當局の斷乎たる措置に就いて見るも、最近外國人の對支觀が全く變化して、支那の實情に關する正しき認識の上に動かんとする傾向のあることを認むるに充分である。それは滿洲事變、續く上海事件を通じて支那の實情が明らかにされ、軍閥と民衆の對立、軍閥政權に對する迎合政策が結局民衆を苦しむるものであることが、外國人就中現地の外國人に、臆げながらも認められるようになった證左である。されば國際自由都市上海の建設に就ても、外國人側に於て眞劍に之が實現を圖つてゐるところである（井村 1932：96）。

……如何にせば上海の恒久和平を期待することが出来るかといふ見地に立脚して、上海地方を完全に軍閥の侵略から救ひ、内外人安住の樂土たらしめんため、境界を定めて財政經

濟の基礎を確立し、獨立司法裁判所を設けて三百萬市民を厳正公平なる法の保護下に置かんとするものである (98)。

……支那軍隊と警察との間、阿片運搬保護權の争奪ありて時ならぬ銃火に脅かされる等の事態幾度となく起つてゐる。随つて上海自由市を建設し、支那軍隊を驅逐して市民の不安を除く必要がある……その反対は、「英國居留民會が今回の上海事件の原因を特別法院、上海附近の武装支那軍及び租界擴張道路の行政權等にありとせるを見て驚異に堪へない。かゝる主張は専ら日本人の意を承けてなされたもので、日本は本年二月戦争の最中に天津、青島、漢口、廣東及び上海に自由市設置の計畫を進め、現に圓卓會議の開催や上海自由市設置を唱道しつゝある用意は、東三省を壟斷して各國の同地に於ける商業を一落千丈の悲境に陥れたため上海地方で之が代償を與へんとするもので、また數箇月に互る淞滬の戦争で各國の商業に莫大なる損害を與へたので自ら賠償の計をなすの必要に迫られてゐることに存するものである」とて相變らず日本に毒づくものであつた (100-101)。

……滿洲問題に就ては目下聯盟調査團が折角解決策を考慮中であるばかりでなく、從來形式的なる支那領土の一部滿洲が、今は本來の獨立に立ち返り嚴然たる獨立國となり、滿洲事變の端を發した日本と滿洲との間に於ける衝突の禍根が現在は完全に取除かれ、日滿親善關係は日一日と密接となりつゝある。最早や日滿間には何等解決すべき舊問題を殘さない (103)。……排日侮日が滿洲事變後初めて起つた譯でもなく、支那側が從來の排日侮日に滿洲事變といふ新しい題目を加へたまでである。排外思想は支那人の有つ傳統である。今日の排日は明日の排英であり排米である。かの五卅事件は、在上海邦人紡績排撃に狂つた遊民労働者の一群が上海南京路まで繰込んだ所を、共同租界警官に追ひ廻はされた所から俄に排日は下火となり、急に排英運動として燃え上つたものであつた。また南京派と廣

東派は今も對立を續け、天津商人と漢口商人は利害をめぐつて睨み合つてゐる。排日侮日は決して滿洲事變の結果ではない。それは支那人獨有の強烈な排外思想の表はれである (104-105)。

支那人は傳統的に強烈な排外思想を有する。それで勢力を擴大せんとする者、利益を獲得せんとする者は必ず排外的言辭を弄し他の共鳴を得て自らの野望を隠して了ふ。清王朝を顛覆した革命運動は滿洲人の統治を排撃し、漢人で統治勢力を占めんとする排滿復漢の運動であつた。南京條約が英清間に締結されたのは支那人の猛烈な排外運動の所産であつた。現在の南京、廣東兩派の對立は浙江人と廣東人の相互排斥である。随つて日本も外國も支那人に向つて排外運動の根絶を期待する前に、先づ彼等の傳統的排外運動に禍されないよう用意することが必要であり、賢明である。そこに上海を國際自由都市に變ぜしむる重大なる意義がある (105)。

……随つて對支貿易を正常の状態に置くためには、日本ばかりでなく列國總て上海自由市の建設に協力しなければならぬ。……殊に支那人の排日運動は日を経ると共に再燃の徵があり、現に最近に於ては國民政府が滿洲事變に對して新たに「九・一八記念日」を制定して排日的思想鼓吹の一項目とし、五卅記念日當日には上海の支那學生民衆らが「打倒日本」の大旗を押し立て、市中を練り歩き、また抗日會の不良分子と市黨部の黨員とが結託して支那人綿絲布商に對し「日貨の取引を行ふ者は我等の手により制裁を加ふる、この後取引を絶対に行ふべからず」との脅迫文をつきつけた等、排日的言動の實例は枚擧に違なき現状である。……それよりも平常日本品が多く賣れてゐる關係から、一朝日本品の値段が落ちると俄かに排日を策動して契約を廢棄する方法が行はれる。これらの事情が交り合つて排日運動となつてゐる。然も國家と稱すべきものゝ無い支那であるから、稱せられる中央政府と協定して排日侮日の根絶を期すること

は事実上不可能である。日本は日本の生くるために斷乎として自ら排日侮日を封ぜなければならぬ。這回の郵便罷業を通じて窺ひ得られる如く、日本にその決心あらば局面打開の途は自ら開かるゝであらう。要は日本の決心である(106-107)〔下線強調は引用者による〕。

ここで興味深いのは、「従来形式的なる支那領土の一部満洲が、今は本来の獨立に立ち返り厳然たる獨立國となり」というロジックの組み立て方と、「排日侮日は決して満州事變の結果ではない。それは支那人獨有の強烈な排外思想の表はれである」ことを強調しているという点である。前者は、「國家と稱すべきものゝ無い支那」という発想と対照を為している。そうすると、後者にいう「排外思想」の基盤はどこに置かれるのかという新たな疑問も生じてしまう。「國家と稱すべきものゝ無い支那」は何を何から「排外」したいというのであろうか。

何れにせよ、こうした記事の夥しい存在によって、「支配されるべき対象」としての中国（「支那」）という認識が、さまざまなレベルで共有されるようなイメージ構築のための環境が、1930年前後の日本で、とりわけ第一次上海事變後の状況において急速に立ち現れてきたことが、ここでもよく分かる。

それとは逆に、帝國主義諸国間の矛盾を見るよりも、むしろそれらの「共同謀議」として事變を捉える、次のような記事も現れている。

……上海に對する日本帝國主義の砲聲が始まってから、もはや二十日以上になる今日まで、激烈な激戦がつづいてゐる。この戦争が滿洲で起こされた戦争の發展したものであることは云ふまでもないし、この戦争の計畫が早く

から日本帝國主義によつて準備されてゐたことも勿論である。……上海攻撃には滿州占領の場合よりもつと計畫的に列強が共同してゐる。今回の攻撃に當つて上海の共同租界が日本帝國主義の根據地になつてゐる事は誰れでも知つてゐる。しかも、共同租界の最大の支配者は英帝國である。この英國の協力で共同租界が三つの警備區域に分けられた。……しかも、この東部と北部とは今回の中心戰場である閘北（上海の北部地方）に接してゐて、その攻撃には戦略上最も有利な場所なのである。各國帝國主義は前もつて此の重大な便利を日本に與へ、日本を援助したのである（『プロレタリア科学』編輯部 1932：3-6）〔下線強調は引用者による〕。

この英帝國主義との関係ばかりでなく、アメリカ帝國主義と日本帝國主義との対立の激化をすでに読み取っている觀察も現れていた。例えば、「帝國主義下の上海」と題された以下のような記述がある。

……中國に於けるアメリカ帝國主義の勢力は上海及びその附近に集中してゐると云ふ點で特に重要である。今この上海へ、日本帝國主義が砲火をあびせかけその一部を占領したのだから日米の對立は當然激しくなつてゐる。この砲撃が上海ならびに全中國の反帝勤勞大衆への攻撃であるが故に、わずかに兩者の爆發を免れてゐるのだ（荒木 1932：153）。

……日本帝國主義の砲撃はこの閘北一帯ばかりでなく更に、南市及びその他の方面のプロレタリアートにも向けられやうとしてゐる。そのために、海軍陸戰隊だけでは足りぬとあつてすでに第十二師團より混成約一旅團を派遣したが更に金澤第九師團の大部隊を派遣し、すでに二月十四日上陸を了へて戰線に立つてゐる。軍隊を派遣したのは日本だけではない、アメリカもイギリスも一應の抗議を日本につきつけてもやはり同じ行動を取つてゐるのだ

(156) [下線強調は引用者による].

それは、日本帝国主義の上海における軍事行動を黙認する「国際帝国主義」と、そこに対峙する「中国勤労者大衆」といった全体的構図を示していくことになる。

……日本××は誰にも遠慮する事なく、思ふがまゝの暴虐を盡してゐる。それに対して帝国主義列強は、一言の文句でも云つたか？
否、租界内の秩序を維持すると云ふ名目を付けて、戒厳令をしき、中国勤労者大衆の反日集會及びデモに對して嚴重な干渉、禁止を命じてゐる。

……かくの如く、国際帝国主義は、日本×の暴虐な行動を黙認し、擁護してゐるのみでなく、更に日本帝国主義とグルになつて中国の反日本帝国主義的兵士の驅逐に狂奔してゐる。其の理由とするところは、中国兵士の反抗する事によつて、租界の秩序が亂れるからであると！これが帝国主義者共のこごつけであり、帝国主義者共の中国人虐殺の唯一の理由だ！（中国労働者通信 1932：159-160）[下線強調は引用者による].

帝国主義諸国間の共同謀議として「上海事変」を捉えると、日本の中国（支那）を見る視線と他の帝国主義諸国の視線とに違いはない段階に到つたのだということがよく分かる。

こうしてプロレタリア諸運動によって提供される中国（「支那」）認識も、「支配される」「抑圧される」対象となっていることを表象しているという意味では、実はこれまで見てきた他の記事と大きく異なるものではない。対象に対するステレオタイプ化という側面から見れば、こうした左翼社会主義イデオロギー言説の方が、ある意味ではより激しい対象の一面化に陥っているといえる。

4. むすびに

「中国に於けるアメリカ帝国主義の勢力は上海及びその附近に集中してゐると云ふ點で特に重要である。今この上海へ、日本帝国主義が砲火をあげせかけその一部を占領したのだから日米の對立は當然激しくなつてゐる」（荒木 1932：153）、という分析がなされている点にも注目しておくべきである。よく知られるように、アメリカ帝国主義に関する、日本軍部の認識が不十分であったため、日米は1941年の開戦に到つたのであり、アメリカは、イデオロギーを問わず第二次国共合作後の抗日戦線への武器供与を継続していた。

1930年前後の日本およびシャンハイにおける言説空間では、そうした社会主義イデオロギー言説が消費される余地があった。それは中国を媒介とした「敵」としてのアメリカ・イメージの形成にも一役買っている。したがって、それらが中国（「支那」）大陸における情勢を大きく動かすものであったという点には、着目しておく必要がある。

帝国主義諸国は、それぞれの大衆を動員していくことで侵略戦争を合理化していく。この時期の近代日本のシャンハイ・イメージの変化も、大衆動員なくしては成り立たなかつた。それは予め植民地化された象徴なのであった。

注

- 1) 「中国」という呼称が日本で使用され始めたのは中国政府（中華民国政府）の要求で外交文章として登場した1930年のことであり、この呼称が日本で一般に用いられるようになったのは戦後1945年以降のことだという問題である。つまり、1945年以前には、日本人に「中国イメージ」など存在しなかつたといつても過言ではない。そこに現象していたのは、「支那イ

メージ」や「上海（シャンハイ・）イメージ」に他ならなかったのである。

およそ一つの国の呼称としてその当該の国が使って欲しいというものを使うのは、至極当然の礼儀である。したがって、現在の日本国民が現在の中華人民共和国について「中国」という呼称を用いることには何の問題もない。だが、中華人民共和国建国以前の歴史的事象や、とくに清朝崩壊後中国に統一政府が建設されるまでの混沌状況についても、「中国」「中国人」と呼ぶには、近代日本のことを知れば知るほど、その正確さにおいて若干の抵抗がある。たとえば、「日支関係」とあるのを「日中関係」という具合に置き換えて便宜上記述してしまうことはあるかもしれないが、現在の中国におけるカテゴリーにおいて「中国人」は中華人民共和国を構成する 56 民族すべてを包含するものであるから、過去の資料に「支那」や「支那人」とあるものをすべて「中国」「中国人」に換えてしまうと記述上も奇妙な事態を生じかねないのである。したがって、本稿では、「支那」を「中国」に書き改めるといった操作は一切していない。同様に、改訂版文献などの場合でそのような訂正が施されているものについて、発行当時のものが参照できなかった場合には、敢えて再訂正するようなこともむろんしていない。

- 2) 本稿では、「シャンハイ」という表現を、「上海」が中国にありながら中国とは異なる位相にある都市イメージをもっていることを表象するために用いている。
- 3) 『犯罪公論』の基本情報については、名古屋大学大学院国際開発研究科に提出された修士論文（『近代日本におけるシャンハイ・イメージ—1930 年前後大衆雑誌の表象する〈他者〉—』）（徐 2005：42）を参照。
- 4) 明治以前の知識人が東アジア国際政治情勢についてこれほど同時代性をもって認識していたことは、中国人の私の目から見るととても驚きであるのだが、丸山眞男によれば、すでにこの段階で後の中央集権主義的な近代日本国家の構想が存在していたという。「……ただ後半期で注意すべきは、徂徠に於て提起されたような封建制建て直しのための制度的改革の提唱が、ヨーロッパの中央集権国家の構想にヒントを得て、本多利明、佐藤信淵等によって更に大規模な形でなされたことである。こうした制度的変革の方向はいずれも封建的政治力の多元性を克服して、強大中央集権的政府の樹立を目指す限

り、多かれ少なかれ絶対主義への傾斜を示すのであり、維新以後の日本の歴史的発展の思想的な先駆しては、尊王論、尊王攘夷論等よりは、遙かに重要な意味を有する。特に規模の大なるものは佐藤信淵で、哲学的には大なるものなしとはいえ、制度的には一種の経済統制国家を目指した一種のユートピア国家の広大な構想を有した。「世界を混同する」というそのユートピア構想は、日本の対外的危機に根ざした劣等感情の倒錯した誇大妄想ともいえる。……」（丸山 1998：205-206）

- 5) 近世近代における「都市は穢いものである」という認識は、ごく一般的な通念として現実であったといえる。「想像を絶した繁栄と荘麗」を表向き支えるには、どこであれ「臭気芬芳たる汚穢、悪臭」が伴ったことは、ヴェルサイユ宮殿にトイレが一つもなかったことや、パリやロンドンの一般庶民の都市生活が糞尿を道端に投棄して成り立っていたことを考えれば、容易に想像がつく。よく知られているように、中国の大都市では自然な飲料水を確保することは、すでに明代においてもできなかった（たとえば岩井（2002）等参照）。日本の場合も同様であり、とりわけ近代都市化していく過程において、都市における衛生上の問題は深刻な「公衆衛生」問題を惹きさせていた。
- 6) ホセ・オルテガ。イ・ガセット（José Ortega y Gasset, 1883～1955）スペインの哲学者。著作としては、『ドン・キホーテをめぐる思索（*Meditaciones del Quijote*）』（1914年）、『大衆の反逆（*La rebelión de las masas*）』（1930年）などがよく知られている。『大衆の反逆』によれば、「大衆」は、けっして愚鈍ではない。大衆は上層階層にも下層階層にもいる。その全体は「無名」である。これがより重要なのであって、「大衆」とは「新しい慣習」のような「心理的事実」なのである。「大衆」に罪はない。だが、「大衆」の動きや考えが何かに反映し、それがその社会の選択した「信念」であると思うようになってしまうと問題が起こる。罪のない「大衆」はいまや「無名の意味」を「やみくもに現代社会におしつけはじめた」のではないかとオルテガはいう。「大衆」の特権は「自分を棚にあげて言動に参加できること」にあり、いつでもその言動を暗示してくれた相手を褒めつくし、またその相手を捨ててしまう特権をもつ。ただし、「大衆」がいつ「心変わり」するかは、誰もわからない。にもかかわらず、社会はこの「大衆」

の特権によって進む。では、「大衆」はいったいどのように生成してきたのであろうか。「自由民主主義（多数決の原理）」と「科学の実験」と「工業化（大量生産、販売、消費）」が大衆をつくったという。

- 7) 明治21年(1889)熊本生まれで、小説家というより今でいうライターであり、上海に在住して紀行文をはじめ短編小説等を著していた。大正11年、読売新聞上海特派員時代に、上海日本堂から「支那香艶叢書」シリーズ(第一巻、支那宮廷秘録、第二巻、西施、第三巻、支那性的小説、第四巻、西太后(前編)、第五巻、西太后(後編)、第六巻、王昭君)、大正12年、「江南の名勝史跡」、「上海百話」、「続上海百話」等を刊行した。

(<http://www.asamiry.jp/bri16a.html> 2007年6月10日に拠る)。

- 8) 「……排日の起りは大正四年の二十一個條問題からである。……大正八年の五四運動から共産運動もやうやく盛んになり、彼等の階級闘争は排外思想に結ばれて進展した。(井上1932:71)……昭和二年の濟南事件の頃には排日も頗る組織立つて来た。それは國民黨市黨部が指導して反日會を組織したからである(72)。……抗日會は市黨部、市商會、ブルジョア側の政治家、大中流商人、新聞記者、賣辦等でプロレタリアとしては右傾派學生が全體の一割に過ぎない。労働者は今度は全然加入してゐない。だから幸ひにして紡績工場は無事であつた。歴年の排日にも拘らず、上海の日本紡績工場は續々増設され、九會社、二十三工場、職工六萬人、投資高二億餘萬といふ發展ぶりである。その外二十の中小工業會社があり、職工一萬三千、投資額三千萬圓に達してゐる。／……排日がこれほど激烈になつてみると、此等の生産機能はどうなつて仕舞ふか、殆んど豫測が出来ない。そこでやうやく強硬意見を吐く者が多くなり、實業家の殆んど全部は上海を失つても満州を保持しなければならぬと決心し、政府を鞭撻して強硬政策を取ることを強調したのは昨年の末頃からである。……大正八年の五四事件以來、政治運動に味をメめた支那學生は其後事ある毎に、排日運動や共産運動に加はり、政治に容喙して小使錢を儲けた(74)。……一月十八日日蓮宗の僧徒が寒行の歸途、引翔港のタオル工場三友實業社前にさしかかつた時、豫ねてから日本人を仇敵としてゐた同社の職工が群集をそゝのかして「日本坊主がお前達を擣り殺しに歩いてゐる

のだ」と言ひ布らしたので、群集は職工等と共に五名の僧侶を袋叩きにし、逃げ遅れた三名は重傷を負ひ内一名は死亡した。目撃者の談に據ると、僧徒等は少しも抵抗せず暫く死者の風を装ひ打つがまゝに任せてゐる中、漸くあたりが静まつたので、隙きを見て起き上がると、職工等は直に追ひ來り、半死半生に至らしめたのであると。此執念き暴虐振りには聴く者涙を浮べた。是に於て我慢に我慢を重ねた居留民の堪忍袋は遂にハチ切れた。二十日拂曉二時半、我が青年同志會の數十名は雨の土砂降りの中を仇討ちに出掛け、白鉢巻、白襪、日本刀を携へ、山と川との合言葉で巡警と渡り合ひ大亂闘の結果、双方死傷者を出し、三友實業社の一部を焼拂つた。續いて同日午後一時から日本人俱樂部で居留民大會が開かれ、「速に陸海軍を派遣し自衛權の發動に據り、抗日救國會の絶滅を期すべし」との決議を可決し、大會の流れは一千名の大示威行進となり、先頭には國旗二旒を押立て、先づ總領事館に村井總領事を訪ひ、強硬談判の誓約を得て、更に陸戰隊本部に向つたが、……」(75-76)。

- 9) 「……由来支那人は大法螺が好きだ。果然、上海事變突發後、得意の大法螺や與太つばちは日本軍中傷の逆宣傳となつて現れた。日々發刊される支那紙は完全にそれ等の故意の大袈裟な誤報で埋まつてゐる有様だ。然も、そうした新聞紙は飛ぶやうに賣れる。人民はさうした日本軍慘敗の大活字を見て、歡喜雀躍して喜んでゐるのだ。……以上で大體支那人の與太振りは理解された事と信じる。正に、戰禍に次ぐに、デマは亂れ飛ぶ、上海ならでは見られぬ風景だ」(犯罪公論特派員②1932:79-83)。

参考文献

- 荒木十郎。1932。「帝國主義下の上海」『プロレタリア科学』4(3):149-156。
池田桃川。1928。「上海の殺人団」『女性』13(4):114-125。
池田桃川。1932。「排日と奪われた貞操(8題)」『犯罪公論』2(4):62-68。
井上紅梅。1932。「惡辣極る排日の真相から日支兩怨破裂に至るまで」『犯罪公論』2(5):71-78。
井村薫雄。1932。「國際都市上海の建設」『外交時報』7:94-107。

- 岩井茂樹. 2002. 「北京：都市と環境」人文科学研究研究所報『人文』49.
(<http://www.zinbun.kyotou.ac.jp/shoho/sh49/kaki4.html> 2007年6月10日に拠る).
- 植手通有. 1974. 『日本近代思想の形成』岩波書店.
- 江口圭一. 1992. 「帝国日本の東アジア支配」(大江志乃夫・浅田喬二・三谷太郎・後藤乾一・小林英夫・高崎宗司・若林正丈・川村湊編集『岩波講座 近代日本と植民地 1 植民地帝国日本』) 岩波書店.
- オルテガ・イ・ガセット. 1969. 神吉敬三訳『大衆の反逆』白水社.
- 小島晋治. 2002. 「日本人の中国観の変化—幕末、維新期を中心に—」(神奈川大学人文学研究所編『日中文化論集多様な角度からのアプローチ』) 勁草書房. 87-117.
- サイド, エドワード・W. 1986. (今沢紀子訳) 『オリエンタリズム』平凡社. (愛徳華・W・萨义徳. 1999. 『東方学』. 中国：生活・讀書・新知三聯書店.)
- 酒井直樹. 2002. (川田潤・齋藤一・末廣幹・野口良平・浜邦彦訳) 『過去の声—18世紀日本の言説における言語の地位』以文社. (原著：Naoki Sakai. 1991. *Voices of the Past: the Status of Language in Eighteenth-century Japanese Discourse*. America: Cornell University Press.)
- 支那排日ポスター畫集. 1932. 『犯罪公論』2(5): 14-23.
- 徐青. 2005. 『近代日本におけるシャンハイ・イメージ—1930年前後大衆雑誌の表象する〈他者〉—』(名古屋大学大学院国際開発研究科修士学位取得論文).
- 中国労働者通信. 1932. 「上海に於ける日本帝國主義の暴虐な殺戮」『プロレタリア科学』4(3): 156-160.
- 犯罪公論特派員①. 1932. 「戦渦の街上海から」『犯罪公論』2(5): 70.
- 犯罪公論特派員②. 1932. 「中国大人はデマが好き!—上海事變支那紙惡宣傳物語」『犯罪公論』2(5): 79-83.
- 本多利明. 1970. 『日本思想大系 44 本多利明・海保青陵』岩波書店.
- 武藤章. 1932. 「上海事變に對する一考察」『犯罪公論』2(12): 53-57.
- プロレタリア科学編輯部. 1932. 「戦争の擴大と新たな危機」『プロレタリア科学』4(3): 2-17.
- 田中直樹. 1932. 「編輯後記」『犯罪公論』2(5): 294.
- 丸山眞男. 1998. 『丸山眞男講義録 日本政治思想史 第1冊』東京大学出版会.
- 毛沢東. 1969. 東京大学近代中国史研究会訳『毛沢東思想万歳』(全2冊) 三一書房.
- 山根幸夫・藤井昇三・中村義・太田勝洪編. 1992. 『近代日中関係史研究入門』研文出版.